

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：12604

研究種目：若手研究

研究期間：2021～2022

課題番号：21K13613

研究課題名（和文）知的障害児の格助詞「が」「を」「に」の困難さに関わる要因の解明

研究課題名（英文）Factors related to difficulty with use of case markers ga, wo, and ni in children with intellectual disabilities

研究代表者

村尾 愛美 (MURAO, Aimi)

東京学芸大学・教育学研究科・研究員

研究者番号：80792415

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,200,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究では、知的障害児の格助詞「が」「を」「に」の誤用の特徴とその要因を明らかにすることを目的とした。その結果、対象とした知的障害児において、動詞項構造は保たれており、項の産出力は定型発達児と同程度であることが明らかになった。一方、格助詞の使用においては、知的障害児は意味役割の影響を強く受ける可能性が伺えた。さらに、定型発達児を対象とした予備的検討から、意味（意味役割）と文法の一般的な対応からの逸脱が格助詞の使用に影響する可能性が示唆された。また、知的障害児を対象として格助詞「が」「を」を含む文の指導を行う場合は、文の可逆性や語順など刺激文の種類に留意する必要があることが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の結果から、知的障害児にみられる格助詞「が」「を」「に」の誤用は、項の産出そのものに起因しない可能性が示唆された。このことは、定型発達児や他の障害種でみられる格助詞の誤用にも当てはまる可能性があり、格助詞の誤用のメカニズムの普遍性に迫るという点で本研究の成果は学術的意義を有する。また、本研究の結果から、指導に用いる刺激文の留意点が示された。言語発達遅滞がみられる児童生徒の文法指導において、格助詞の指導法の確立は教育上・臨床上、喫緊の課題となっている。したがって、指導上の留意点が得られた点は、本研究の社会的、臨床的意義である。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to clarify the characteristics of and factors contributing to the incorrect use of the case markers ga, wo, and ni in children with intellectual disabilities. The results showed that these children maintained the verb-argument structure and their production of argument was comparable to that of children with typical development. On the other hand, the use of case markers may be strongly influenced by semantic roles in children with intellectual disabilities. Furthermore, a preliminary study on children with typical development suggests that deviations from the usual correspondence between meaning (semantic roles) and grammar may affect the use of case markers. In addition, when teaching sentences containing case markers ga and wo to children with intellectual disabilities, it is necessary to consider the types of stimulus sentences, such as reversibility and word order of the sentences.

研究分野：特別支援教育

キーワード：知的障害 格助詞 項 動詞 指導

## 1. 研究開始当初の背景

知的障害児の言語の問題については、構音の問題、発話の不明瞭や非流暢性、語彙の少なさなどがよく知られており、音韻的側面や語彙的側面からの検討は多くなされている。これに対して、統語的側面に視点を当てた知的障害児の言語研究は、わが国では、著しく少ない。統語的側面に視点を当てた従来の研究から、知的障害児が格助詞の使用に困難さを示す可能性が示唆されている (Koizumi et al., 2019; 斉藤, 2002; 竹尾・伊藤, 2014)。しかし、格助詞の言語学的性質を踏まえた検討はなされておらず、困難さの特徴とそれに関わる要因は十分に明らかになっていない。そのため、格助詞の指導では、根拠に基づく指導が十分になされているとはいえない状況にある。

研究代表者はこれまで、特異的言語発達障害 (specific language impairment: 以下 SLI) 児を対象として、格助詞の誤用を中心に検討を行ってきた。SLI は、知的障害、聴覚障害、神経学的異常など、明らかな言語発達を阻害する要因がないにもかかわらず、言語発達に遅れを示す障害を指す。このことから、SLI 児の言語特徴は、言語発達遅滞の最も基盤となる知見を提供すると考えられている。そのため、欧米では、言語発達遅滞を示す他の障害種、例えば知的障害児と SLI 児の言語特徴の比較に関する検討が多くなされている。

これまでの研究から、SLI 児の格助詞の困難さの特徴として、文法と関わりをもつ格助詞「が」「を」「に」が著しく困難であることなどが明らかになっている (村尾・伊藤, 2017; 村尾・伊藤, 2021; Murao et al., 2017; 村尾ら, 2012)。しかし、SLI 児にみられる格助詞「が」「を」「に」の困難さが SLI に固有のものなのか、知的障害など他の障害と同様のものなのかを解明することが今後解決すべき点として残されていた。そこで、まず、知的障害児の格助詞「が」「を」「に」の誤用の特徴を明らかにすることを当面の目標とした。

本研究の核心をなす「問い」は、「知的障害児の格助詞「が」「を」「に」の誤用の特徴とその背景にある困難さは何か」であった。

## 2. 研究の目的

上記の「問い」に答えるために、本研究では、動詞に視点を当て、以下の3つの視点から、知的障害児の格助詞「が」「を」「に」の誤用の特徴とその背景にある困難さの解明を目指した。

- ・知的障害児の格助詞「が」「を」「に」の誤用と動詞項構造との関係
- ・知的障害児の格助詞「が」「を」「に」の誤用と受動文との関係
- ・知的障害児の格助詞「が」「を」「に」の誤用と状態動詞文との関係

## 3. 研究の方法

新型コロナウイルス感染症の影響により、当初の計画に変更が生じ、以下の3つの研究を実施した。

研究1：知的障害児の格助詞「が」「を」「に」の誤用と文の可逆性と語順との関係

研究2：知的障害児の格助詞「が」「を」「に」の誤用と動詞項構造との関係

研究3：知的障害児の格助詞「が」「を」「に」の誤用と状態動詞・可能動詞・受動文との関係 - 定型発達児を対象とした予備的検討 -

それぞれの研究方法は以下の通りである。

### (1) 研究1：文の可逆性と語順との関係

知的障害を主たる対象とする特別支援学校中学部・高等部の生徒23名を対象として、格助詞挿入課題を実施した。この課題は、格助詞「が」「を」を挿入すべき2箇所が空欄となっており、線画の内容に一致するよう空欄を埋める課題であった。刺激文は、非可逆・基本語順文(例：お母さん( )りんご( )たべる)、非可逆・非基本語順文(例：りんご( )お母さん( )たべる)、可逆・基本語順文(例：男の子( )女の子( )おす)、可逆・非基本語順文(例：女の子( )男の子( )おす)、各4文、計16文であった。

### (2) 研究2：動詞項構造との関係

知的障害を主たる対象とする特別支援学校中学部・高等部の生徒32名と4~7歳の定型発達児12名を対象として、モデリング法を用いた線画説明課題を行った。刺激画および刺激文は、一項述語文(例：うさぎさんが笑う)、二項述語・可逆文(例：いぬさんがうさぎさんを押す)、二項述語・非可逆文(例：同じ動詞)(例：ねこさんが机を押す)、二項述語・非可逆文(例：異なる動詞)(例：くまさんがりんごを食べる)、三項述語文(例：いぬさんがうさぎさんにプレゼントをあげる)の5種類であり、各4文、計20文であった。対象児の発話における、動詞と項、格助詞の有無及び正誤を分析した。

(3) 研究3：状態動詞・可能動詞・受動文との関係 - 定型発達児を対象とした予備的検討 -

小学2~4年生の定型発達児5名を対象として、1) 格助詞挿入課題と2) 文法性判断課題の2種類の課題を行った。格助詞挿入課題の刺激文は、状態動詞文(例：いぬさんにじかんがわかる)、可能動詞文(例：ぶたさんにかんじがよめる)、受動文(例：うさぎさんにぶたさんがおされる)が各4文、ダミーの文(例：ぱんださんがぶたさんをなでる)が2文、計14文であった。文法性判断課題は、格助詞挿入課題で使用した4種類の刺激文のみを用いて、はそれぞれ正文と非文(例：いぬさんをじかんがわかる)が各4文、は正文と非文が各2文、計28文について正誤判断を求め、誤と判断した場合は、誤とした箇所を修正するよう指示した。

4. 研究成果

(1) 研究1：文の可逆性と語順との関係

図1は刺激文の種類ごとの平均正答率を示したものである。可逆・非基本語順文の平均正答率が他の3種類の刺激文に比して有意に低く、それ以外の刺激文間では差は認められなかった。

図2は、対象児ごとの正答率を刺激文の種類ごとに示したものである。対象児ごとの正答率をみると、文の可逆性の影響を強く受ける者と、語順の影響を強く受ける者の両方が存在することが示された。さらに、誤用の特徴をみると、基本語順文の格配列(「が・を」)が多く見られること、目標とする格助詞「が」「を」以外の格助詞である「に」「で」「と」を挿入する反応が見られることが明らかになった。これらの結果から、知的障害児は格に関する言語知識が十分ではないため、意味や語順を手掛かりとするストラテジーを用いる可能性が示唆された。また、対象児によって文の可逆性や語順の影響の受け方が異なることから、構文指導の際にはこの点に配慮する必要があることを示した。

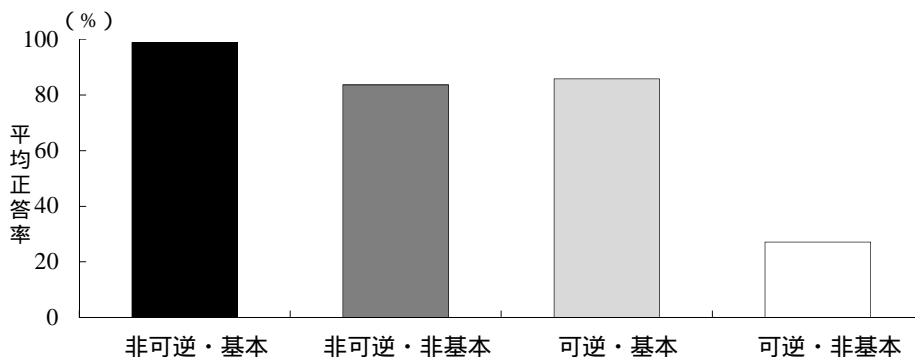


図1 刺激文の種類ごとの平均正答率 (村尾, 2021より作成)

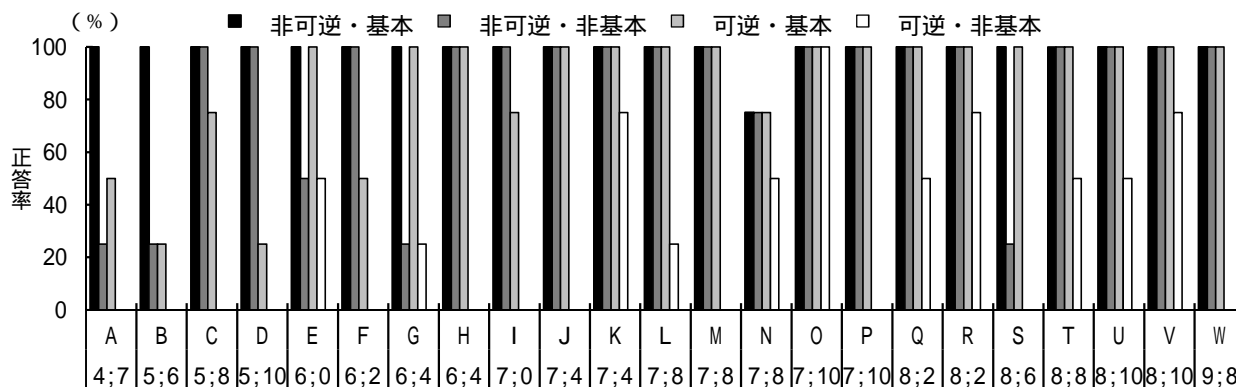


図2 対象児ごとの正答率 (村尾, 2021より作成)

(2) 研究2：動詞項構造との関係

動詞が求めるすべての項が正しく産出された文の割合を算出すると、知的障害児、定型発達児ともに平均90%以上であった。産出された項のみを対象として、格助詞の誤用率を算出すると、知的障害児では、被動作主を示す「を」、受益者を示す「に」の誤用率がそれぞれ19.6%、15.6%と高い傾向にあった。省略においては、対象を示す「を」の省略率が7.1%と高い傾向にあった。一方、定型発達児では、被動作主「を」の誤用率が4.3%と他に比して高い傾向があり、受益者「に」の誤用は認められなかった。省略については、対象「を」が3.1%と高い傾向にあった。これらの結果から、知的障害児と定型発達児は、項の産出力や格助詞の誤用および省略の特徴は類似しているものの、知的障害児の格助詞の使用には、意味役割がより強く影響している可能性が考えられた。

(3) 研究3：状態動詞・可能動詞・受動文との関係 - 定型発達児を対象とした予備的検討 -

研究3の格助詞挿入課題における定型発達児の平均正答率は58.8%であり、文法性判断課題における平均正答率は74.3%であった。ダミーの文は、文法性判断課題において5名中1名が1文を誤るのみであった。表1は格助詞挿入課題における刺激文の種類ごとの正答率を示したものである。状態動詞文の正答率は可能動詞文や受動文に比して低い傾向にあったが、A児は状態動詞文の正答率が最も高かった。

学齢期のSLI児及び定型発達児を対象として、格助詞挿入課題(能動文と受動文で構成されている)を実施したMurao et al. (2017)では、定型発達児の平均正答率は85.3%であった。これに対して、研究3の格助詞挿入課題における定型発達児の平均正答率は58.8%と低く、特に状態動詞文の正答率が低い傾向にあった。これらの結果から、意味(意味役割)と文法との一般的な関係からの逸脱は格助詞の使用に影響を及ぼす可能性が示唆された。

表1 格助詞挿入課題における刺激の種類ごとの正答率(%)

対象児	刺激文の種類		
	状態動詞	可能動詞	受動
A	50.0	25.0	0
B	0	0	100.0
C	0	100.0	100.0
D	0	100.0	100.0
E	0	100.0	0

(4) 研究1~3のまとめ

表2は長谷川(1999)を踏まえた文の構築にかかわる構造・文法・意味と本研究の分析の視点との関係を示したものである。知的障害児にみられる格助詞「が」「を」「に」の誤用は、項の産出そのものに起因しない可能性が示唆された。また、定型発達児を対象とした予備的調査から、意味(意味役割)と文法との一般的な関係からの逸脱は格助詞の使用に影響を及ぼす可能性が示唆された。これらのことから、知的障害児の格助詞の誤用は、文法のレベルよりも上のレベルの困難さによる可能性が考えられた。

表2 文の構築にかかわる構造・文法・意味と本研究の分析の視点との関係

文の構築にかかわる構造・文法・意味				本研究の分析の視点
構造	男の子が 名詞句	女の子を 名詞句	押す 動詞	研究3
文法	主語	目的語	述語	状態動詞・可能動詞・受動文
意味	動作主	対象(被動作主)		研究2 動詞項構造

<文献>

- 長谷川信子(1999) 生成日本語学入門. 大修館書店.
- Koizumi, M., Saito, Y., & Kojima, M. (2019) Syntactic development in children with intellectual disabilities: Using structured assessment of syntax. *Journal of Intellectual Disability Research*, 63, 1428-1440.
- 村尾愛美(2021) 文の可逆性及び語順が知的障害児の格助詞の使用に及ぼす影響 - 構文指導の観点から -. 東京学芸大学紀要総合教育科学系, 73, 315-324.
- 村尾愛美・伊藤友彦(2017) 日本語を母語とする特異的言語発達障害児における格助詞の誤用 - 自然発話と実験課題の誤用率の比較 -. 音声言語医学, 58, 177-184.
- 村尾愛美・伊藤友彦(2021) 特異的言語発達障害児の文完成課題における格助詞の使用の特徴. 音声言語医学, 62, 39-45.
- Murao, A., Ito, T., Fukuda, S. E., & Fukuda, S. (2017) Grammatical case-marking in Japanese children with SLI. *Clinical Linguistics & Phonetics*, 31, 711-723.
- 村尾愛美・松本(島守)幸代・伊藤友彦(2012) 特異的言語発達障害児2例における格助詞の誤用の特徴 - 構造格と内在格の視点から -. 音声言語医学, 53, 194-198.
- 斉藤佐和子(2002) ダウン症児者の構文能力. 音声言語医学, 43, 196-199.
- 竹尾勇太・伊藤友彦(2014) 知的障害児における受動文の言語知識 - 直接受動文と間接受動文の比較 -. 特殊教育学研究, 52, 39-45.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 村尾愛美	4. 巻 73
2. 論文標題 文の可逆性及び語順が知的障害児の格助詞の使用に及ぼす影響：構文指導の観点から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東京学芸大学紀要 総合教育科学系	6. 最初と最後の頁 315-324
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 村尾愛美
2. 発表標題 知的障害児における動詞と項，格助詞の使用の特徴 - 項構造に視点を当てて -
3. 学会等名 第48回日本コミュニケーション障害学会学術講演会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 村尾愛美
2. 発表標題 知的障害児と定型発達児における項および格助詞の使用の特徴
3. 学会等名 第49回日本コミュニケーション障害学会学術講演会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------